



福島隆史 (ふくしま・たかし)

公認会計士。(株)サステナビリティ会計事務所
／サステイバー・コミュニケーションズ(株)代表
取締役としてコンサル／レポート制作／保証を
行う。著書「CSRエピソード」幻冬舎 2017年。

17ゴールの意味を 深く知ろう

SDGsのカラフルな17色のアイコンを見かけたことのある読者の方も多いのではないだろうか。アイコンの一つひとつにはゴール1から17まで、次のようなさまざまなテーマでのゴール設定がなされています。1 貧困、2 飢餓、3 健康、4 教育、5 ジェンダー、6 水、7 エネルギー、8 雇用、9 インフラ、10 平等、11 居住、12 生産、13 気候変動、14 海洋、15 陸の生態系、16 平和、17 パートナリシップ、です。17のゴールそれぞれについて今ご紹介したような短い単語を覚えてただけで終わりとはせず、その中身をしっかりと理解することが大切です。そこでこの後、ゴール一つ一つについて解説していくのがよいと思うのですが、ある事例をご紹介することで、各ゴールを深く理解することの大切さを、まずはお伝えたいと思います。

ある会社において、SDGsへの貢献をいかに果たしていくのかという議論のなか、ゴール16の平和への貢献に関連して、会社近くの平和公園での社員によるボランティア清掃が相当するのではないか、といった検討がなされたことがありました。もちろんSDGs文書を読めばわかることですし、あるいは前回お伝えしたようにSDGsの根底には世界で最も遅れているところに手を伸ばして救済しようという精神が流れていることを併せ考えれば、その意味するところはある程度、推察できることです。ゴール16の平和は、すべての形態の暴力の排除や、すべての人々の司法への平等なアクセス確保が希求されているのであって、テロリズム・犯罪の撲滅などが含まれているのです。

では、どうしてそのようなおかしな解釈が起こってしまうのか。内容を深く理解していないからだ、と言ってしまうとそれまでのなのですが、更にSDGsへの貢献において企業が陥りがちな大いなる誤解に基づく行動の一つとして、17ゴールすべてに関与することがカッコいいことのように思えてしまうことが遠因となっています。先ほどの例についても、自らの事業活動を全ゴールにあてはめることを目指した会社が、ゴール16に関連した自社活動が見つからないことから、「平和」という言葉から連想される自社活動を想起し、ひねり出した苦渋の一案なのは、もちろんこのような無理なあたりはめ、カッコいいことでもなんでもありません。

SDGs

Sustainable Development Goals
(持続可能な開発目標)

2015年国連が採択した持続可能な開発のための
2030年アジェンダ

